

2016年9月24日秋期講座第1回『ペリクリーズ』復習 (於：岐部ホール)

『ペリクリーズ』は、2015年11月21日、第9回の講座で一度取り上げられた作品でございます。従いまして、本日の復習と解説は重複を避け、簡潔に申し上げます。

秋期講座第一回目は、冒頭、神父様お得意の「変柳」(変な川柳)で和やかに始まりました。『ペリクリーズ』は、上演および四つ折り本の書籍出版においても、大変人気の高い作品でございました。ところが、奇妙なことに、1623年に出版されたシェイクスピアの戯曲集第一・二つ折り本(F1)に含まれておりません。1662年に出版された第三・二つ折り本(F3)の二刷りで、悲劇の最後におかれています。編集を担当したシェイクスピアの同僚ヘミングとコンデルが悲喜劇というジャンルを認識していなかった故でしょう。

『ペリクリーズ』が軽んじられた理由のひとつは、この劇がジョージ・ウィルキンズとの共作によるものだからです。

ウィルキンズが書き始めたストーリーを、シェイクスピアが引き継ぎたいと思った理由を神父様は三つ挙げられました。

第一の理由は、本劇の冒頭のエピソードです。アンタイオカス王と美貌の王女が登場します。王の謎を解いた者には美しい王女を妻として与えるが、謎が解けない場合、その命が奪われるという危険な賭けに、主人公ペリクリーズは果敢に挑戦します。ペリクリーズは謎を解き、王と王女が親子にもかかわらず近親相姦の関係にある事実気づきました。宗教改革の初期、1558年、神学者ニコラス・サンダーはラテン語の本の中で、ヘンリー八世が二番目の王妃アン・ブーリンの父親で二人は近親相姦の罪を犯したと記しています。英語に翻訳されたのは後のことですが、イングランドのカトリックの間では、この噂が流布していました。子の噂が劇の冒頭のエピソードに反映されていたために、劇団関係者は『ペリクリーズ』危険視し、F1から排除したのかもしれませんが。

第二の理由は、『マクベス』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』、『アテネのタイモン』には、聖母マリアのような理想的な女主人公が不在でした。シェイクスピアは、『ペリクリーズ』で、聖母マリアを想起させる女主人公を再び登場させます。しかも、『リア王』のリア王とコーディリアの悲劇的結末を補うかのように、『ペリクリーズ』では、父と娘の再会の喜びを描き、受難劇のサイクルを完成させました。『リア王』と『ペリクリーズ』の関連性は、この二つの劇が、1609年から1610年にかけてヨークシャーのレキュザントのために上演されたことから窺えます。

第三の理由は、最初に着想したのはジョージ・ウィルキンズだったのかもしれませんが、中世の詩人ジョン・ガワーを口上役として登場させていることです。シェイクスピアのセリフは、**iambic pentameter**(弱強五歩格)の韻文が基本になっています。ガワーのセリフは、**iambic tetrameter**(弱強四歩格)の魅力的な韻律で綴られ、中世への郷愁を示すかのような古風な雰囲気を生み出します。ベン・ジョンソンは、シェイクスピアが意図した中世を思い出させるような古風な雰囲気の意味を理解できず、『ペリクリーズ』を「かび臭い物

語」と酷評しました。ジョンソンの低い評価が、人気のあった『ペリクリーズ』をF1に収めなかった可能性が考えられます。

シェイクスピアの手になる第三幕以降に目を向けましょう。第三幕第一場は、『リア王』の嵐の場面を思い出させるような激しい嵐の場面となっています。1605年以降、キリスト教の神の名を舞台上で口にすることが禁止されたので、『ペリクリーズ』は異教的な印象を与えます。しかし、シェイクスピアは、ギリシア・ローマの神々の名を使っていますが、ネオ・プラトニック的比喩を用いて、父なる神、神の子キリスト、聖母マリアを表現しているのです。

ペリクリーズの子供は海の上で生まれたことから、海を表す「マリーナ」と命名されます。出産で亡くなった母親は密封された棺に納められ、海に投じられました。離散した家族は、幾多の苦難を経た後、父と娘が再会を果たすばかりか、亡くなったと思われた妻との奇跡的な再会が描かれています。

付加的なコメントとして、神父様は、『ペリクリーズ』がエフェサスを舞台にしている点で、シェイクスピアの最初の喜劇『間違いの喜劇』を彷彿とさせると説明してくださいました。

第二部質疑応答

質問1. ジェイムズ朝の時代、および、劇場が再開された王政復古期においても『ペリクリーズ』は大変人気の高い劇でした。なぜ、その人気が凋落しまったのでしょうか？

お答え：18世紀以降、第一二つ折り本（F1）が重視されるようになったため、F1に収められていない『ペリクリーズ』が軽視されたと考えられます。

質問2. シェイクスピアは中世を代表する詩人ジョン・ガワーを口上役とした理由と、口上役ガワーは、劇でどのような役割をしているのでしょうか？

お答え：質問に関しては、「どうでもよい」というお答えになった上で、ウィルキンズとシェイクスピアの分担部分に関するコメント、ガワーのセリフの弱強四歩格のリズムが生み出す古風な雰囲気の魅力、ウィルキンズがカトリック故に悪い評判を立てられた可能性などをわかりやすく解説してくださいました。

朗唱：プリントの『ペリクリーズ』の名セリフを神父様に倣って朗唱後、閉会しました。